

小説

新宿高校

物語

小説
新宿高校
物語
浦島太郎著

成人向け

献辞

私が新宿高校で
国語を教え

顧問だったバドミントン部員として交流し

その後、アニメソングで

一世を風靡しながら

四十四歳で急逝した

シンガーソングライター

岡崎律子さんの

霊前に捧げる

世界の平和とともに

律ちゃんのみ霊の

安からんことを祈る

浦島太郎

はじめに

太郎は大学を卒業すると
高校紛争後の荒れた
新宿高校の教師になります

大悪党や小悪党の
教師たちの
悪質ないじめや嫌がらせと
闘いながら
生徒たちから散々な目にも遇います

失恋を繰り返しますが
新宿裏町の優しい女たちに慰められます

やがて学問に目覚め
教え子と結婚し
研究と言う新世界に
旅立ちます

糾（あざな） える縄のような禍福に翻弄される若者の
成長物語と
登場人物たちの後日談を
お楽しみください
著者

お断り

この小説に書かれたことはすべて創作で、実在するいかなる学校や組織とも人物とも関係ありません

また規約上、成人向けとしましたが、この程度の性描写は中学生でも見慣れたもので

大人の恋愛の実態を学ぶ利益の方が大きいと考えますので
特に青少年の愛読を勧めます

著者

目次

<u>序章</u>	<u>太郎</u>	<u>63歲</u>
<u>着任</u>	<u>太郎</u>	<u>23歲</u>
<u>怒涛</u>	<u>太郎</u>	<u>24歲</u>
<u>鍛鍊</u>	<u>太郎</u>	<u>25歲</u>
<u>苦難</u>	<u>太郎</u>	<u>26歲</u>
<u>克服</u>	<u>太郎</u>	<u>27歲</u>
<u>裏町</u>	<u>太郎</u>	<u>28歲</u>
<u>性愛</u>	<u>太郎</u>	<u>29歲</u>
<u>学問</u>	<u>太郎</u>	<u>30歲</u>
<u>結婚</u>	<u>太郎</u>	<u>34歲</u>
<u>門出</u>	<u>太郎</u>	<u>37歲</u>
<u>終章</u>	<u>太郎</u>	<u>65歲</u>

序章 太郎 63歳

浦島太郎は長い研究者人生を終えて
今は悠々自適
一日三回の散歩と買い物と
時たまの研究会と
売れない小説を書いて暮らしている

仲よく別居

恋女房が寛容で
太郎は東京の郊外に一人で
広い賃貸を借り
書齋代わりに使い
読書と執筆と研究に専念し
仲よく別居することを
許してくれる

閑居

太郎はスーパーの店員以外の
人間とはほとんど交流しない
ごく少数の研究仲間と偶に会うだけ
そのほかはフェイスブックで
よく話すのが三人だけ
妻とは週に一回長電話する

教え子

そこに見眼麗しい女性が加わった
23歳の年に初めて教えた
高校二年生だ

その後、パリ大学で仏文学を修め
フランスの航空会社に
通訳として勤務した後
フランス人と結婚して
パリに住んでいる才媛で
ともこという

とここは
新宿高校が懐かしくて
よくフェイスブックで太郎と語り合う

太郎は俄然郷愁を掻き立てられ
竜宮城から亀に乗って
下界に戻ることにした

とここは当時新宿区に住み
新宿の駅裏から
歩いて新宿高校に通っていた
太郎はとここが二年生の時に
着任し二年間教えた

とここが
下校する時間には
新宿高校から南口に抜ける路地に
姉ちゃん屋、略してちゃんやという
万（よろず）屋の向かいにある
酒屋で角打ちと言い
缶詰を肴に一杯飲ませる店で
立ちのみしていた

「角（かく）打ち」とは
九州の方言で、東京では
当時は立ち飲みと言った
酒屋で買った酒を飲み
買った缶詰やつまみを食べるので
食品衛生法の調理に当たらない

太郎は金がないから立ち飲みが多い
立ち飲みには、調理しないのと
調理した肴を出す店と
二通りあるから
角打ちと言うと紛らわしくない

貧乏人立って飲むのが好きじゃない

ちゃんやに寄っている男子生徒は
太郎を見つけると
「せんせーい」と大声で叫び
太郎をうろたえさせた

そこで二三杯飲むと
東口前を西口に向かい
歌舞伎町を右に見て地下道を潜ると
左側に犬屋がある
犬好きな太郎は
しばらく愛らしい犬を見て心を癒す

とまこが帰宅した時間には
太郎は思い出横丁で飲んでいた
いつも一人で、それが性に合っている
太郎は群れない

一匹の狼もまた人恋し

新宿情話

「新宿は西口の
間口五尺の ぽん太の店が
とうとうつぶれて 泣いてるヒロ子
三畳一間で よかったら
ついておいでよ ぼくんちに」
ちあきなおみの絶唱だ

西口から甲州街道の
陸橋を渡ったあたりに
こんな店があった

どんな小さな居酒屋でも
入り口の幅は一間、1.8メートルだ
一間は6尺だ
しかしぽん太の店は五尺
1.5メートル

その店の名前は澄子と言ひ
間口五尺だが
ちあきなおみのような
妖艶な女性ではなく
着物を着た品のいい御姐さんが
一人でやっていた
年は二十五歳

ちゃんやの前の酒屋で
立ち飲みをし
地下道を潜って小便横町の
入り口でもう一度立ち飲みし
向かいの鯨カツ屋の二階にあがり
それからこの店に入るのが
太郎のフルコースだった

いつも太郎は一人で
それでは恋人などできる

わけはなく
このお姐さんと話しながら
段々に女性に慣れていった
店の名と同じ澄子と言った

この店の目と鼻の先に
ともこの家がある

何でわかったかと言うと
遠足を引率した時
バスの長旅でたいてい一人は
女子が車酔いをする

それで若い私が
家まで送り届けさせられる
そうしたら
その女子のお母さんと一緒に
ともこのお母さんが
出て来たのだ

車酔いの女子とともこは
小学校から同級で
お母さん同士も
仲がよかったのだろう

お母さんたちは四十歳台
その頃は太郎の倍の年だが
今思うと女盛りで綺麗な盛りだ
黄昏時に夕焼けた新宿の裏町が
幻想的だった

夕焼けて新宿駅裏路地照らす

学生の頃

ちょっと戻ろう

教師になる前

小便横町の入り口の立ち飲み屋で
一杯五十円の安酒を四杯飲んだ頃

同じテーブルの労働者が

「お前どこの学生だ？」

「早稲田です」

「安保反対と騒いでいるが
そんなにアメリカが嫌いか」

太郎は頷いた

それから目の前の鯨カツ屋の
二階に上がった

太郎は、小学校の給食に出た
鯨カツが懐かしくてならない
からしをたっぷり付けて
今度は焼酎を飲みながら食べた
キャベツをいっぱい柔らかく煮た
味噌汁もうまい

鯨（くじら）カツ給食の味懐かしい

まだ学生の頃、鯨（げい）カツ屋の
目の前のおかみさんに
「鯨カツはうまかったけど
脱脂粉乳はまずかったな
あれは吐き気がしたよ」と言うと

おかみさんは、「贅沢言うんじゃないよ
あれは占領軍が呉れたもので
そのおかげであんたたちは
大きくなったんじゃないか
安保反対なんて言うんじゃないよ」

吐き気した脱脂粉乳懐かしい

「そう言えばそうだな
焼酎もう一杯」
安い焼酎に悪酔いして
あっと言う間に嫌米から
親米になってしまった
こんな男に新宿高校の教師が
務まるのだろうか

さて太郎の聖域
竜宮城から五十年前に
タイムスリップしよう

着任 太郎 23歳
都の東北瘠田大学四年生の
浦島太郎は
学部長の山添教授から呼ばれた
「新宿高校と言うところから
一番優秀な学生を紹介して
ほしいという照会があった
来週の月曜日に面接があるから
行きなさい」

「わかりました
それで新宿高校とはどういう
学校ですか？」
「昔は府立五中と言った
最近は大頭大に百人入っていたが
今は激減した
だからお前にお鉢が回って来た」

なんとなく
嫌な予感がしたが就職しないで
塾の教師になるのは
嫌だから面接に行くことにした

太郎は学力に自信があった
高校ではビリから二番だったが
積年の恨みを果たすために
猛勉強して
三十倍の倍率だった瘦田大学に
合格してからは
はずみがついて勉強し出した

何より国語国文学科という
国語ばかりの勉強が楽しくて
しかたなかった
太郎は読書以外何にも
できなかつたからだ

それでいつも一番前に座り
教授たちの講義を速記録のように
ノートした

試験前にはそれを丸暗記して
臨んだから
成績は90点以上の秀ばかりだった
「俺が選ばれるのは当たり前だ」
と増長していた

思い上がる男に天罰靨（てき）面だ

新宿高校

昔は頭大に百人入らせるために
年間五回の特別考査があり
その平均点は30点台
テスト問題は滅茶苦茶に難しかった
しかしその考査で30番以内に
常時入っていると
現役で頭大に入れる

そのために猛勉強して
毎年のように自殺者が出た

当時はベビーブームで
競争が激しく
受験地獄という言葉があった

受験のストレスで
思い詰めて自殺する高校生が多かった
高度成長時代だ

受験などで死ぬ馬鹿がいた成長期

太郎が瘦田大学に入ったのも
三十五倍と言う
滅茶苦茶な狭き門であった
そこに入ったことで自信が付き
さらに、名門高校の教師として
指名されたことで
ますます増長した

しかし世の中はそんなに甘くない
日本は敗戦の焼け野原から
立ち直ると
また富国強兵の道を歩み
平和憲法はいつしか復古
(ほご) にされた

競走馬のように子どもたちの
尻を鞭で打ち続けて走らせた
競馬に勝ったところで
人間性の一かけらもない
昔の新宿高校は
新宿競馬場と言ってもよかった

競馬馬育てるだけの進学校

奇妙な面接

校長も教頭も出て来なくて
乱雑に散らかった国語科の職員室の
汚いソファに座らされた

「新宿高校は去年高校紛争があった
ここの教師たちは平均年齢が
五十歳くらいで
若者と話ができない
それでたいへんな思いをしたんだ」
がらがら声があった
生徒を怒鳴りすぎて声が
嘎れたのだろう

「真夜中と言います」
本当は間余中と言うのだが
根性が真夜中のように
真っ暗闇だからだ

上方弁の教師が言った
「下野です
それで兎に角若い教師を採用して
生徒たちと語り合っ欲しいと
みんなで相談し
昔、この学校で講師をしていた
辻浦先生が瘦田大学で教えていたので
若くて優秀な人を
紹介してくださるように

お願いしたのです」

また真夜中が
「とにかく生徒と遊んでやって
ください
雑用は俺たちがやるから」

太郎は「変なことを言う」
と思ったが
笑うわけにもいかなかった
「雑用をしないのはありがたいですが
授業はやるんですね」と
冗談のつもりで聞いた
「当たり前だろう馬鹿野郎」と真夜中
初対面の人間に
馬鹿野郎はないだろうとむかついた

初対面馬鹿野郎とは馬鹿野郎

まだ23歳、人生の何たるかも知らず
この教師たちの深い心の闇は
想像さえできなかった

この教師たちは管理職の許可も得ず
自分たちだけで
太郎の採用を決めてしまった
それだけで十分おかしな
学校だったのだ
労働組合運動がまだ盛んだった
頃で教師たちは、校長など屁とも
思っていなかった

国語科の教師は真夜中を含めて
四十代半ば過ぎが二人
後は五十代ばかり
しかも選りすぐれた
授業のベテランばかり

その中に23歳が入ると言うことが
どんなに恐ろしい事かは
間もなくわかる

瘦田大学の国文の授業は
非常に質が高く
今でも、専門性では
当時のどんな大学をも
凌駕していたと思うが
困ったことに授業の仕方を
全く教えてくれなかった
太郎は一から始めるしかなかった

「授業はどうしたらいいんでしょうか」

下野の目が光った

「大学で教わったんじゃないの？」

「いいえ、国語科教育法という

授業は受けましたが

教育の歴史ばかりで

授業のやり方は

教わりませんでした」

「瘦田大学も地に堕ちたね

大隈重信が開校したころは

名教授ばかり集めたが

「悪貨は良貨を駆逐する」

「悪い教師が良い教師を追い出した」かね？」

「いいえ、その教授以外は

たいへん興味深い授業でした

ただ一方的な講義ばかりでした」

「教員の世界は新米には教えない

しかし失敗したら

いじめたり怒ったりする」

「えっ？」

「俺たちもそうされて来た」と下野

「嫌な世界だな
ここは蛸部屋かよ」と思ったが
言わなかった
背筋を冷たい物が走り
実際その通りになった

最後に高齢の女性が口を開いた
「とにかくわからないことは
何でも聞いてください」
つまり太郎を信用してない
勝手にやっちゃいけないと
釘を刺されたこともその時は
わからなかった

高校紛争

太郎が着任した前年度に
新宿高校で紛争が起きた
新宿高校全共闘は
「高校は受験勉強を
するところではない」
と主張し、三か月間授業をせず
「じゃ何をすればいいのか？」と
全部のクラスが一日中討論をした

その結論が出たと言う話を聞かない
教師たちの教養が低く
奥深くまで導けなかった
その答えが出ていれば
もう少しまともな日本になっていた

首謀者は、今は世界的な音楽家として
知られる坂下遼一、後に
厚生大臣になる塩山、テレビの
人気者で後に石川さゆりと結婚し
離婚した矢場健太

紛争を生徒が自然発生的にやる
はずはないので
教師がけしかけたに決まっている
それは真夜中しか考えられない
事実、塩山はその後も
真夜中たちと一緒に
スキーに行っていたし
矢場もよく新宿高校に来た

坂下は音大に進み教育実習に来た
が女にもてて
寄って来る女とみんな寝た
童貞の太郎は羨ましかった

彼らは紛争勃発時
同窓会館に立てこもった
そんなことを生徒だけで
できるはずがないから
手引きした教師がいた
真夜中だ
翌朝、校長室に乱入し占拠した
そして受験教育撤廃の
要求を突き付けた
真夜中の操り人形だ

太郎が着任後
学園祭で生徒たちが招くと
矢場は着物を着た石川さゆり
を連れて気持ちよく来てくれ
講演をした
しかし、デビュー間もない
石川は一言も話をしなかった

矢場はその後テレビに出なくなった
高校に来ると人懐っこかったが
石川さゆりには見捨てられた

石川は実はものすごい
おしゃべりで冗句交じりに
猛烈に話す

テレビで、美川憲一に下剤を貰ったが
運転中に効き出して下痢になり
商店のトイレを借りた話など
面白おかしく話したのを
ラジオで聞いたことがある

それなのに新宿高校に来たとき
一言も話さなかったのは
もう矢場にむかっていたからだ
所詮貫禄が違う

塩山は同窓会にまめに出てきて
馬鹿な教師たちから
「将来の首相候補」などと
持ち上げられて
いい気になっていたが
バチが当たって
失脚してしまった

新宿全共闘の書記長が
その後頭大から日銀に入り
自民党の国会議員になるなんてことが
おかしい
真夜中の理論は最初から
破綻していた
高校を引っ掻き回しただけの
ただのごろつき教師だった
新宿全共闘は全壊した

坂下が新宿高校に寄り付かなくなった
理由は恐らく真夜中のせいだ
酒を飲むと、その校長室突入の朝
坂下が遅刻して来た

真夜中が理由を問い詰めると
「お母さんが起こしてくれなかった」
という話を繰り返して
坂下のプライドを傷つけたからだ

先生と呼ばれるほどの馬鹿ばかり

坂下は学園祭で生徒たちが
講演を頼んでも
そのためもあるだろう
絶対に顔を出さなかった

しかし自分の母校ではないか

私は幾ら世界的音楽家でも
平和運動や反核運動をやっても
信用していない

心の故郷の母校を捨てて
大衆に迎合しているだけだ

故郷（ふるさと）を捨てて媚びうる
男あり

怒涛 太郎 24歳
生徒たちは、太郎の授業を
始めの内は面白がっていた
しかし教え方を知らないから
故郷の岩国高校の教師を真似て
読んで解釈して質問するだけ

中島敦の山月記を教えると
五行しか進まない日もあった
終わったところに3 C、
4月15日などと書いておくが
字が汚くて自分でも読めず
前回やったところをまたやると
生徒は黙っている
同じ冗談を繰り返して
くすくす笑いに気付いて
やりなおす

「こんなひどい授業は初めて受けたよ」
と言われた
ベテラン中のベテランの中に
新卒が放り込まれたのだから
当たり前なのだ

放り込んだ方が悪い
自分らだって、最初は太郎と
大差なかったはずだ

担任は二年生のクラスで
当時複数担任制度を取っていて
真夜中と一緒に
ともこたちのクラスだった

真夜中は生徒に絶大の信頼があり
太郎は教え方もわからない

ひどいことに
男子3対女子1だった
それは同僚教師に言わせると
「女の子が多くなると
全体の士気が落ちる」と
女性差別を公然とした

女性差別は歴然とし
飲み会の後で机を吹くのは女
スケベな教師がいて
飲むと女性教師にキスする
しかし誰も咎めない

職員会議で、進級できない悪がきを
数人の女性教師が同席しているのに
「女の腐ったような奴」
と罵ってもお咎めなしだった

男だけで飲んでいると
独身の俺をつかまえて
「お前、二年生の女子の中で
だれとおまんこしたい」
これはセクハラだ

「女が増えると士気が下がる」
と言うがそれは事実ではなく
女子は都内の最高レベルだが
男子は二流で西や戸山に行けない
自暴自棄みたいなごろつきが
少なくない

元々頭のいい女子は
どんどん向学心がなくなり
学力がキープできなくなる
女性差別の被害者だが
ともこのように
英語が抜群にできる才媛は

卒業後一年間
日仏学院で猛勉強すると
一発でパリ大学に合格した

今でもありありと思い出せるのは
そのクラスで館山の
新宿高校の海の家で合宿した時

太郎が海で立ち泳ぎをしながら
「月も―――わびしい――い
路地いうーら――の
屋台あい――いの――酒えの
ほーろー苦いいがあさ」
と三波春夫のちゃんちきおけさ
を気持ちよく歌った

すぐ前で立ち泳ぎしていた
ともこが
「最後まで唄って」と言う
そこまでしか知らなかったし
女性に慣れていないから
恥ずかしくて
どう切り返したらいいかわからず
苦笑いするばかりだった

青い空と青い海
ともこの若く白い肌と
美しい盛りのしなやかな水着姿
おいしそうに膨らんだ乳房と
愛くるしい笑顔は
カラー写真のようにくっきりと
目に焼き付いている

青空ととも子の笑顔と青い海

ともこは、浅丘ルリ子に似た
愛くるしい顔立ちで

太郎は浅丘ルリ子が好きだったから
密かにお気に入りだった

でも、教師は好きな女子生徒に
近づき過ぎたり話し過ぎたり
授業で指名し過ぎたり
してはいけない
しかし教師も人の子だから
そうそう抑制できるものでもない

ともこだけ好きな気持ちを隠しつつ

真夜中は、今はブッククラブと
言われるような授業をやっていた
教室を4～5人ずつのグループに分けグループごとに別々に
好きな文庫本を読ませ
話し合わせる
どうしてそんなことが
可能なのかわからなかったが
生徒たちは楽しそうにやっていた

太郎は真似してみたが
グループに分けて座らせたが最後
全員が勝手に私語を始め
学級崩壊状態になり
どんな大きな声を出しても
通らない

新米の教師困らす悪いガキ

生徒たちは、昔の新宿高校生
ではなかった
受験教育をやめてから
東京都は学校群制度を採り入れ
新宿は駒場と組んで
西や戸山の下位になった

それまでは日比谷と並んで
頭大合格百人を競っていたから
新宿潰しの陰謀が
都庁にあったに違いない

高校紛争だけでなく
教師たちは最左翼の組合員で
都の施策に一から十まで
逆らったから目の敵なのだ

女子は都の最上位で
ともこのように
パリ大学に入るような
才媛ばかりだったが
男子は一流とは言えない二流
しかも紛争後で学ぶ気がなく
荒れに荒れていた

凋落は始まっていた
しかし新宿の教師は馬鹿だから
原因は受験教育をやめて
学力が下がったからだ
と盲信していた

原因はそんなところはない
高校紛争の答えが
出ていなかったからだ
答えが出ていれば
「理想の学校」が出来ていたのだが
日本にそんな学校ができたという話を
聞かない

今、太郎が考える理想の学校は
授業日は月、火、木、金
水曜日は自然散策や登山をする
朝八時から十時まで読書
十時から十二時まで討論

午後は一時から二時まで英語

後は帰りたいものは帰る
数学や理科をやりたいものはやる
場所は北海道の摩周湖畔とか
九州の阿蘇山麓とか
四国の四万十川とか
秋田の十和田湖畔のような
心が広々とするところに
全寮制にすると良い
つかの間の白昼夢だった

野や山で育てよ子ども広々と

「学力とは何か」を明らかに
しなければいけないのに
文科省は学力の定義をしない
そして教養のない
親や教師は
「学力とは大学に入る力だ」
と誤解している

入試が間違っているのだから
お話にならないのだ
例えば東大に入っても
早稲田に入っても
討論する力は育たない
だったらなぜ入試制度を変えないのか

白昼夢の続きだが
例えば、内申点だけで
大学の定員の二倍までに絞る

全員に二時間の論述を書かせる
五問ぐらい出して選ばせる
1. どうしたら戦争をなくせるか
2. どうしたらいじめをなくせるか

3. 理想の学校を設計せよ
4. 一番感動した本は何か
5. あなたが首相なら日本を
どう変えるか

そして、論文に基づいて
全員に面接をやる
そうすれば大学も日本も変わる

入試さえ変えれば日本は変わるのに

さてこの入試改革案に
どんな反論が来るか
「論述と面接を客観的に評価できない」
そんなことを言っているから
百年たっても変わらない

教師三人で五段階で評価する
その合計点の高い方から合格させる
それもできないなら教師をやめろ

真夜中に戻ろう
現実 は 地獄 だった
真夜中のいじめもひどかった
国語科の教師たちと酒を飲んでいると
みんな20歳以上年長だから
言葉の挟みようがなくて
ずっと黙っていると
「お前、そのつまみを食って
何か感想を言って見ろ」と言う
虐待である

一生忘れられないような虐待は続いた
「お前、後一万冊本を読んだら
口をきいてやるよ」
真夜中がろくな本を読んで
いるとは思えないが
悔しかった

しかし、実はいじめ以上に強力な
教育はないのである
悔しいから実際よく本を読んだ
一年間で一万冊ぐらい軽く読んだと
思うが、真夜中と口をききたい
とは思わなかった

著作権の関係があるので p.31～130 は削除します

全部読みたい人は、アマゾンで買うか、

観潮亭主人までご連絡ください

(*^_^*)

置手紙も残さないで消えたの」

「どうして？」

「わからないわ」

「でも思い当たることは？」

「あたしが本当に愛して

いなかったからね」

「三十歳にもなると親もうるさいしね

手ごろな男と妥協して

結婚しちゃったのよ

でも本当はあなたのことが

忘れられなかったの

エクスタシーの時に

「太郎さん」ってつぶやいちゃった

翌日よ、彼が蒸発したのは」

「じゃ何で電話もして来なかったの」

「あたしあなたに依存し過ぎて

いると思ったの

それであなたから離れて自立

しようと思って」

「馬鹿だな」

「馬鹿よ」

「もう一度やり直さないか」

「うん あたしのこと愛している？」

「愛しているよ」

「どのくらい」

「地球を十回まわるくらい」

「どっかで聞いたようなせりふね」

教え子と再会の夜更けて行く

それで学習塾の仕事をやめて

久美子さんのお店を継いだの

ここで待っていればあなたに逢える

気がして

「奥さんと仲よくしてる？」
「仕事の都合で別居してるけどね
月に一回は会いに行くし
週に一回は長電話する
仲よく別居してるよ」

「どうして別れないの？」
「別れる必要がないし
仲よくて、喧嘩もしないし
それから大事なことは
子は鋸（かすがい）だよ
鋸とは二つの木材を繋ぐ時に
U字型の釘を打つ

もうみんな成人したけど
恋愛だの結婚だの
何だかんだ相談事がある
とても離婚なんてできないよ」

「浮気しても罪悪感はないの？」
「今はないな
見つからないように
迷惑をかけないように
妻に優しく大切に
この三つの黄金ルールさえ
守っていればね」

迷惑をかけない浮気してもよし

「時々は飲みに来てね」
「うん」
「もう一回やろうか」
小雪は答える代わりに
両腕をからませてキスをしてきた

晶（しょう）子との再会
太郎が片思いしていたが
悪い真夜中に奪われた晶子を
ネットで見つけた

得意の陶芸で酒器や食器を焼いて
それを使ってもてなす
陶芸居酒屋を
新宿二丁目でやっていた

行ってみると
華やかな笑顔が昔と変わらない
「あら 太郎さんじゃない
元気？」
「うん 振られた時は
元気なかったけどね
あの頃は考える気力もなくなって
躁病になって
一か月病休しちゃった

その後一年間は鬱病で
口もきけなかった
でも、もう大丈夫
おかげで強くなったよ」

「ごめんなさいね
あたしも若かったから
あなたより一個下だから
あなたが23歳で
あたしが22歳ね

片恋で振られた女（ひと）に再会し

あなたのことは好きだったんだけど
あなた、何もしないでしょ
そのうちに真夜中に

たらしこまれちゃったのよ
好きだ好きだって言われて
滅茶苦茶に優しくされて
おまんこされたら女はダメね
後悔してるわ」

「いいんだよ
俺がアホだったんだから
真夜中のことは恨んだけど
あなたは恨まない」

晶子との一夜
「どうしてあんな奴と
一緒になったの？
子どもを産んだ最初の妻を捨てて
別の女と結婚し、片っ端から
卒業生と無責任なセックスを
やりながらあなたと再婚する
鬼畜みたいな奴じゃないか」

「そうだね
両親もあきれて勘当されちゃったのよ」
「何であんなやつと一緒にになったの？」
「あたしには優しくかったからね」
「ほかの女性には鬼畜みたいでもか？」
「それから、弱いダメな人だと思うと
あたしは、無性に可哀そく
なっちゃうの」

「織田作之助の夫婦善哉に出て来る
蝶子という女もそうだね
稼いだ金を男が放蕩して
何度も使い込まれても
何度騙されても愛し続ける」

「そんな感じかなあ
でもあの人は実は弱いんだよね

弱いから太郎さんをいじめたりする
でも、結局太郎さんは出世して
家庭を持って幸せになり
真夜中は癌で還暦までも生きられなかったでしょう？

最後は「痛い痛い」って
可哀そうだったわ
肝硬変と胃がんと肺癌
毎日酒を一升飲んで煙草は二箱
自殺と同じよ

実は頭がやられて
精神分裂病（今の統合失調症）
で妄想がひどかったの
太郎が殺しに来るって
喚いてたわよ」
「ちっとも可哀そうじゃないよ
自業自得だ」

駄目男愛する女あればこそ

「俺にとっては憎悪しかないよ
あの男だけはどうしても赦せない
大体、三人の教師があいつに
いじめられて新宿を辞めてった」

「もういいじゃない
許してやんなさいよ
今晚はあたしんちで泊って
いかない？」
「そうするか」

「あなたも成長したわね」
と言っても何をしたわけではなかった
二人でこたつに入って
冷酒を夜通し飲んで思い出話に
花を咲かせただけだった

「勘当は解けた？」
「うんやっど 十年前にお父さんが
大病を患ってね
死ぬ前に赦してくれたよ
それからはお母さんの介護をしながら
暮らしているの
また飲みにおいでよ」
太郎の目から涙がはらはらと落ち
晶子ももらい泣きしていた

最後に握手をした
初めて触れた肌だった

ともことの再会
思い出横丁の裏手の
改装されてデパートのレストランのようにきれいになった鳥宴で会った

「あなたは変わらないね
今でも高校二年生の頃みたいに
キュートだ
浅丘ルリ子によく似てるね」
「ありがと 先生も変わらないわ」

「ここは昔は汚ならしくて
貧乏サラリーマンが群がっていた
その後、中毒で死ぬ人が続出して
禁止されたレバ刺しなんてのを
焼酎飲みながら食べていた」

「どうしてるの？」
「男の子二人と女の子一人が成人して
楽隠居をしています
それまでは飛行機に乗って
英語とフランス語の
通訳をやっていたんです」

「すごいね 沢先生に教わったんだね
まだ旧制中学の府立六中の頃の
教師が残っていて
その教師たちは
大学教授なんてのよりも
力があつた
幸運だったね」

「はい幸せでした
それで文法などは通訳になってからも後で随分助かりました」

「あなたの家まで送ろう
途中の居酒屋に

紹介したい人がいる」

ともことの一晩

甲州街道の陸橋を越えると
澄子の縄暖簾（なわのれん）があった
澄子は還暦を過ぎても壮健で
間口五尺の店を守っていた
肌艶（はだつや）もよく
五十路の女盛りに見える

「あら綺麗な人ね

新しい恋人？」

「いや教え子だよ

新卒の時教えたんだ

実家がこの近くにある」

「どこかしら？」

「この角を曲がった小路の

突き当りです」

「あら じゃ唐木さんのお嬢さん？」

「どうしてわかるの？」

「だってお父さんにそっくりなもの」

「お父さんは一日おきに

この店に通って来たのよ

焼酎のボトルを入れて

お湯割りにしてたわ

時々お母さんから電話が

かかってくるのよ

「澄子のどこがいいのよ？」

早く帰って来なさい」

なんて聞こえてくるの

「母は性格がきついですから

小唄の師匠をしてるんですけど

厳しいからみんなやめちゃうの」

「わかるわ ははは」
「でもほんとは優しい人です」
「そうだろうね
だからお父さんに構うんだよね」

「お邪魔になるといけないから
実家に帰ります
先生さよなら
またフェイスブックでお話し
しましょうね」
「うん そうしよう ありがとう」
「こちらこそ楽しかったわ」

「久しぶりに泊っていきなさいよ」
「泊って何をするんだよ」
「決まってるじゃない」
「うん 女って何歳までできるの？」
「灰になるまでよ」

「全然年を取らないね
何を食ってるの？」
「男の生气よ」
「精液じゃないのか？」

「あたしは淫乱じゃないからね
二股はできないの
あなたが来なくなっからは
空き家だったわ
女はそれでも平気なのよ」

結語

下手な授業

教師には授業が上手な人と
下手な人がいる

大して苦勞をしないのに
子どもの心をとらえて
どんどん発言させられる教師がいる
しかし大部分の教師は
そんなことはできない

太郎は間違いなく下手な方だ
思えば大学四年で教育実習に行った時から下手な授業をやり続けてきた

最悪な思い出は

30歳の時に、東大に内地留学した時
言語学科の教授が見に来てくれて
新宿高校で研究授業をやった

グループに分かれて
話し合いをさせた
三時間貰った

前の時間まではよく
意見を言っていたのに
東大教授が見ていると
一言も発言しなくなった
示し合わせたのかもしれない
生徒は残酷なことをする

焦れば焦るほど生徒は口を閉ざす
背中から冷たい汗が流れ出た
「何と俺は授業が下手なのだろう」
と痛感した

不器用と根気

世の中には器用な人と

不器用な人がいる
器用な人はすぐできるが
不器用な人は幾ら努力しても
中々うまくできない

太郎は極端な不器用で
授業に限らず
女性関係でも人間関係でも
唄でも料理でも
中々うまくいかない

しかしその分だけ人のやらない
努力をするから
気が付くと随分実力を
蓄えている

丑年と天神様
太郎は丑年生まれだ
浦島家は遠い昔に
菅原道真から分家した
天神様には必ず牛の銅像がある

道真も丑年生まれで
努力の人だったのである

ただ不器用な人で
政敵につけこまれて失脚した
太郎も同僚や上司に理解されず
失敗を繰り返しながら
失脚寸前で
どうにかこうにか転落を免れて来た

悔いの多い人生だが
失敗を乗り越える努力で
頂上を歩き続け
いつのまにかその道の
権威になっていた

丑年の根気に怖いものはない

しかし、山月記の李徴のように
誰とも交らうことなく
孤高を貫き通した
不器用で簡単には
脚光を浴びないから
孤高を保てたのである

岡崎律子

学年で一番可愛いと言われた女子だが
大人しく控えめで
大和なでしこそのもので
自分のことを殆ど語らなかった

バドミントンは下手でもなければ
強くもないが
美しいフォームで
何でも器用にこなす

国語も教えたが
何より勉強がよくできて
国語については、トップクラスを
譲らず
英語などもトップの成績だった

律ちゃんの本物の姿を知るのは
卒業して大分たってから
同期の女子部員から
コンサートの案内を貰ってからだ

律ちゃんは1959年生まれ
太郎より十歳若い
だから太郎が26歳から28歳まで
教えた
まだ教師として安定してはいないが
未熟な時期は越えていたから
少し余裕もできた頃だ

律ちゃんは、小学校三年生まで
長崎県の軍艦島にあった
小学校に学んだ

今は無人の廃墟だが
1960年代まで

律ちゃんが小学生の頃は
東京より人口密度が高かった
海底炭鉱で栄えていたのだ

父親が三菱鉱業の幹部だったが
1969年ごろ
1974年の閉山五年前に
東京に転居した

どういう事情があったかわからないが
炭鉱の上にある小学校で
炭鉱夫の子と鉱山会社の幹部の子が
仲よくやっていけるのだろうか
何も分からないうちはともかく
物心が付いて来たら
ややこしい世界になるはずだ

軍艦島どんな苦労があったやら

世界文化遺産に登録されるとき
強制労働の歴史を韓国から
抗議されたように
悲しい歴史があった島だ

しかし軍艦島の話は
新宿高校在学中も
卒業してからも律ちゃんからは
聞いたことがない
よい思い出ではなかったのかも
しれない

始めてコンサートに行ったときは
既に少女アニメの主題歌を歌っていて
知る人は知る歌手になっていた

テレビアニメ「魔法のプリンセス
ミンキーモモ」の主題歌が有名だ

また、「ラブひな」の「Sakura Saku」
も明るく軽快な曲で
今でも人気が高いのも頷ける
細い体と優しい顔と声
高校一年生で会ったころと変わらない

律ちゃんのアニメソングに癒される

軽快さではユーミンに似ているが
癒しと言う点では
ユーミンを越えている

真偽は定かでないが
キングレコードの内部抗争に
巻き込まれていたという
ネット情報もある

しかし、バドミントンや授業を通じて
よく知っている律ちゃんは
いじめられてもいじめるような
人柄ではなく
抗争などとは全く無縁の人柄
であることは断言しておきたい

どこまでも優しい人こそいじめられ

新宿高校でバドミントン部に
入ると同時に友人二人と
バンドを結成した

コンサートが終わると出口で
握手をしてくれた
手の温もりがまだ残っている

律ちゃんの手の手の温もりの懐かしさ

律っちゃんと松田聖子
コンサートの後で律ちゃんを交えて

女子部員たちと
話し合う機会があった
「「松田聖子なんて」という
人がいますが
あれだけ歌うのはたいへんな力が
あるんです」
と律ちゃんと言ったのが印象深かった

松田聖子はタフで
娘の自殺で休んでいたが
間もなく全国ツアーを再開する

松田聖子は何度も結婚したが
律ちゃんは独身を通した
終生独身の女性には
仕事一途の人が多い

私と十歳しか違わず
仲もよかったから
私が一生懸命口説いたら
結婚していたかもしれない
しかし学者と芸能人には
接点がなかった

律ちゃんと結婚したら夢世界

しかし若死にするほど無理を
したのは残念だ
過労死の一種ではないかと思うと
会社の健康管理を疑いたくなる

藤圭子などもずいぶん売れたから
会社がロボットのように
こき使ってぼろぼろになった

よい人が早死にをする憂き世かな

律ちゃんは他の歌手のためにも

随分多くの作曲をした
熱狂的なファンがいるものの
松田聖子のような
大ヒットと言うこともなかったが
随分多くの作品を残している

「天使のような」、「妖精のような」と
言われるが、誰にも悪い気持ち
を持たせない天性の善人だった

だれにでも優しい天使のような人

無類の美貌は生涯衰えなかったが
可愛だけの歌手ではなく
音楽性の高い洗練された作曲と
歌唱に努力した
今でも高く評価され
ファンが途絶えないゆえんだ

律ちゃんは可愛だけの人でなし

音楽業界で生き残ると言うような
タフなタイプの人ではなかったのかも
しれないが病室に機材を持ち込んで
最後まで作曲していたというのが
寿命を縮めたと思うと残念だ

律っちゃんの死
まもなく病気で亡くなったという
知らせがあり、その後、生前の
ビデオを集めてコンサートが
開かれた時に行った

44歳の若さで死んでしまっただが
その一年前に胃がんに冒されていた
しかし胃がんはたいていは
治る癌である

病床で作曲するなどと言う
無理がたたったのではないか
レコード会社が
ドル箱だから無理をさせたの
ではないかと思う

儲け主義天使の心踏みにじり

しかし、律ちゃんには
熱狂的なファンがいて
死んでも愛され続けている

新宿高校に咲いた一輪の
蓮の花のような妖精に
哀悼の気持ちを捧げたい

今でも普通の優しい顔で
すぐそばにいるような気がするのは
律ちゃんの靈魂が浮遊して
いるのだろう
この文によってみ霊が
鎮まりますように



自分が歌う時は感情のまま、
純度高く表現できれば…。

岡崎 律子

——音楽的にもデビュー時のフレンチポップスっぽい作風からずいぶん変わっていますよね。

「最初は私の声質がそれっぽかったのですが周りの人がフレンチポップス寄りを期待していて、そうなってしまったんです。自分はその気はなかったんですが隠れたサービスピッチを發揮してしまつて(笑)。」

「だから今思うとデビューの1、2年は違う洋服を着ていたなって、それが特に、昨年の「リッツベリー・フィールズ」からはいろんな制約なく自分で自由に出来る環境になって、ようやく自分の音楽が作れるようになったかな、と思います。」

——林原めぐみさんをはじめ多くの声優さんに曲を提供して認識され、ファンも多くついているわけですが、そのへんはどう思われていますか。

「そうですね、やっぱり林原さんファンの方でその後私を知ってもらうケースが多いんですが、とてもうれいんですね。せつかく自分のアルバム作ってもまだ少人数にしか聴いてもらえないので、自分の中でも、特にポップス界があつてアニメ界があつてとか気にしてなくて全部同じなんです。」

——岡崎さんの曲ってそんな括りを感じさせないですね。普通のポップソングで。

「それと歌って下さる方に恵まれているな、と思いますね。いわゆるアニメ風に歌っている人がいないんです。そこが大きいかな。」

——これまで多くの人に楽曲提供しているわけですが、その際に気を遣うところはどこですか。

「人に提供する場合は、やっぱり声を出すのはその人なので似合わないものは作らないように、歌う人に合わせるつもりで作っています。林原めぐみさんの場合は直接話をして、どんなことを言いたいかを聞いて作ったりしているんですけど、生氣ですがその人に乗り移れば、私の理想だと思います。」

——前作「リッツベリー・フィールズ」はそれまで提供したアニメ楽曲のセルフカバー集で、岡崎さんの集大成のような作品でしたが、今作はどう取り組まれましたか。

「私はアルバムを作るから曲を作る人ではなくて、出来た曲がたまつたからアルバムにしたいんですね。」

——でも「おはよう」というタイトルに新しい岡崎さんの決意が表れているのでしょうか。

「そう言われるとありがたいですね(笑)。タイトルを決めるのはいつもレコーディングの後なんですけど、今回は少し急がされて、早く決まつたんです。英語やフランス語のすかしたものにすると、はなくて、日本語にしたくて、しかも「おはよう」という響きと文字にしたときの形がかわいかったのでそうつけました。」

妖精が天に召されて蓮の花

この雑誌記事を読むと
「あまり多くの人に聞いてもらってない」と語っている

しかし、文学作品でもそうだが
読者が多いと言うことは
文学の質の高さと関係ない

夏目漱石は著名で
「坊ちゃん」の読者は非常に多いが
文学的なレベルは低い

一方ドストエフスキーを読む人は
非常に少ないが文学性は
漱石より遥かに高い

律ちゃんの音楽はアニメ音楽の
水準を越えていたから
爆発的なヒットにはならなかった
のではないか

本当は松田聖子より音楽のレベルが
高いのではないか
或いは
ユーミンより高いのではないか
その言葉を霊界にいる
律ちゃんに捧げたい

律ちゃんの唄はこれから花開く

とは言うものの
もうあの律ちゃんの
優しい微笑みも
つぶらな瞳も
還って来ないと思うと

太郎の目には涙がこみあげて来た

律ちゃんを思い出す度涙ぐむ

もし太郎が律ちゃんと結婚していたら
決して死なせなかったと思う

律ちゃんのテレビ初出演のビデオも
メドレーも

岡崎律子 YouTube
で検索できる

「君さえいれば」で絶好調の頃の
律ちゃんが見える
何とお腹を少し見せている
三十歳代だと思う

太郎より十歳下で適齢であり
親しくもあつたし
好きでもあつたが
結婚相手などと
夢にも考えなかった

芸能人と結婚していたら
太郎は学者と両立は困難なので
運命の神様がそうさせなかったのだ
と思う

結婚して歌手をやめると言う道も
あつたろうが
それは余りに勿体ない
ただ、こんなに早死にしない
生き方はあつたと思う

ウィスパーヴォイスと言って
囁くように歌う

作曲からスタートし

歌手デビューは34歳と遅いが
高校生の頃の優しさがそのまま
涙が溢れてくる

生涯一教師

太郎は高校教師をやめても
まもなく教師を教えるようになった

つまり教育実習を終え
新宿高校で教え始めてから
東大や国際基督教大学でも
教え続け、たくさんの教師たちや
司書や校長・教頭や役人にも教えた

今も、ネットや対面で教師たちに
教え続けている
言わば生涯一教師で
管理職になったこともなく
生涯平の教師として
一生を送り

死ぬまで、今はネットを通じた
著述によって教え続けるだろう

生涯をただの教師で終わりたい

さようなら新宿高校
新宿高校の思いでは遠くなったが
思い出は生き続けている
今も新宿高校と共に
太郎は生き続けている

新宿高校は心の故郷だが
故郷は遠くにいて思うものではない
懐かしい時には思い出し
寂しい時には懐かしみ
自信をなくした時には勇気を貰う

新宿は心の故郷（こきょう）懐かしく

新宿の駅裏の居酒屋の思い出とともに
角打ちをした酒屋の店先

鯨カツ屋の二階
思い出横丁の通りも

優しかった縄のれんの女たちの
思い出とともに
新宿は太郎の心の故郷だ
さよなら新宿高校
こんにちは新宿高校

喜びも悲しみも幾年月を隔てて
新宿の裏通りとともに
新宿の物語りは巡り続ける

新宿の駅裏偲び涙ぐむ

完

後書き

浦島太郎の「小説新宿高校物語」は
ここで幕を閉じます

架空の新宿高校を舞台に、
架空の人々が演ずる空想の物語りを
描きました

物語を通して、人の生き方や、
青春や恋愛や教育の在り方についても考えていただければ幸いです

例えば、太郎は真夜中という
質（たち）の悪い教師から
凄まじいいじめを受けますが、
そのいじめに耐えることで
強く逞しく成長します

いじめは今も世の中に
満ち溢れています
どう対処すれば乗り越えられるかも
一緒に考えていただければ
人生の展望は明るく開けて行きます

山登りは登りが終わると思うと
また上り坂になります
挫けたり諦めたりしない人だけが
山頂の眺望を楽しめます

山登り坂また坂の上り坂

ここまで、長い物語をお読みいただいたことに感謝します

浦島太郎

2022年 3月15日 第一稿執筆

2022年 3月18日 第二稿執筆

2022年 3月19日 第三稿執筆

2022年 3月20日 第四稿執筆

2022年 3月21日 完成稿執筆

小説新宿高校物語

浦島太郎著

2022年3月21日発行

発行者

ありもと ひでふみ

発行所

日本ブッククラブ協会

<http://www12.plala.or.jp/bookclub/>